

[共同研究：日本と東アジアのコミュニケーションの総合的研究]

倭寇と王直

三 宅 亨

1. はじめに

日本は、周囲を海に囲まれているために歴史的にみると他の国々との交流が少なく、ときには孤立していたという意見がある。確かに、国交という点からみると、近隣諸国との国交が中断した時期が何度かある。しかし、国家という公式の外交レベルではなく、非公式な民間レベルで歴史を見直してみると、我が国は常に東アジアの国々とつながっていたといえる。大小様々な船によってヒト・モノ・情報が行き交っていた。東シナ海を中心とする地域との交流を通じて多くの文化や文明がこの国に伝わってきた。とすれば、日本は海によって隔てられていたのではなく、海によって海外の国々とつながってきたといえるのではないだろうか。

本稿では、この東シナ海域で中世に活躍した「倭寇」の活動に焦点をあてて、日本の東アジア地域との交流の跡を追ってみる。そして、16世紀のなかばに倭寇の頭目であった王直という人物の足跡をたどってみることにする。いわば、陸上の動向を中心とする歴史ではなく海域の歴史を、グローバル・ヒストリーの観点から探ってみたい。

西暦600（あるいは607）年に聖徳太子が中心となって始まった遣隋使による中国との国交は、隋が滅び唐の時代と変わった後も遣唐使として9世紀半ばまで我が国の朝廷から公式の使が送り続けられた。しかし、唐が衰退すると、894年に菅原道真の建議によって遣唐使の派遣を見直すことになり、その後足利義満による明朝への朝貢が始まる15世紀初めまで、約500年間にわたって両国家間の正式の交流はなかった。中央、すなわち都の為政者は次第に内陸志向になっていったが、一方では九州を中心とする西の周辺部の人々は常に海洋志向を持ち続け、遣唐使の廃止以降も中国や朝鮮半島の船が西国の島や港に來航するだけでなく、我が国の船も近くの国々を訪れていた。国の中心（陸上）の動向を扱う歴史観では、このような周辺部の動きについては軽視ないしは看過される恐れがある。本稿は、周辺部に視点の中心を置いて、環東シナ海地域の人々の歴史の一部を描く試みである。

2. 倭 寇

倭寇は、一般には「中世（14～16世紀）に中国沿岸・朝鮮半島など東シナ海で暴れまわった日本人を中心とする海賊集団」といわれることが多い。しかし、このような表現には注意する必要がある。「日本人を中心とする」、「海賊」という二つの語句はそのままでは誤解を生みやすいからである。その点については、2.2と2.3で扱う。

2.1 「倭寇」という名称

まず、「倭寇」という言葉から見ることにする。「倭」という語は「日本（人）」を表す名詞で、しばしば蔑称として使われている。「寇」は会意文字で「他人の家に入り込んで、人を叩く」という原義から、「他人に害を与える」という意味を持つようになった動詞である。すなわち、「倭寇」とは「主語名詞＋述語動詞」という構造を持ち、後ろに地名を伴う。例えば、「倭寇金州」（『高麗史』1223年の条）を書き下し文にすると「倭金州あだヲ寇ス」という具合である。「倭のやつらが金州を襲った」という意味である。しかし、彼らの活動が次第に活発になるにつれて、「倭寇」という言葉が名詞として用いられるようになった。様々な文献資料にあたってみると、「倭寇」という言葉は多様な意味で使われていることがわかる。これについては、2.3以下でみていくことにする。

2.2 倭人

倭寇を構成する人々は、「日本人を中心とする」という言い方は、初期の倭寇については正しいが、16世紀の全盛時代には日本人はむしろ少数派であった。倭寇の活動期は普通「前期倭寇」（14世紀前半～15世紀）と「後期倭寇」（16世紀）の二つの時期に分けられる。あとでみるように、当初は九州北西部あたりの日本人が中心であったが、前期倭寇期のなかばになると、かしやく・さいじん 禾尺・才人などと呼ばれる朝鮮半島の賤民や濟州島人らが加わり、後期倭寇期には日本人は減り、むしろ中国人が中心となり、ときにはポルトガル人や東南アジアの人々も巻き込んで、東シナ海での活動を展開していることがわかる。

村井章介（1993）は次のように述べている。

「倭寇」「倭人」「倭語」「倭服」などという場合の「倭」は、けっして「日本」と等置できる語ではない。民族的には朝鮮人であっても倭寇によって対馬などに連行され、ある期間をそこでくらし、通交者として朝鮮に渡った人は、倭人とよばれている。海賊の標識とされた倭服・倭語はこの海域に生きる人々の共通のいでたち、共通の言語であって、「日本」の服装や言語とまったくおなじではなかった。

こうした人間集団のなかに、民族的な意味での日本人、朝鮮人、中国人がみずからを投じた（あるいは引きこまれた）とき、かれらが身におびる特徴は、なかば日本、なかば朝鮮、なかば中国といったあいまいな（マージナルな）ものとなる。こうした

境界性をおびた人間類型を〈マージナル・マン〉とよぶ。かれらの活動が、国家的ないし民族的な境界領域を一体化させ〈国境をまたぐ地域〉を創りだす。こうして生成した〈地域〉は国家や民族にとっては、自己のアイデンティティをゆるがす存在として警戒の対象となる。その結果〈地域〉は血なまぐさい争闘の場となり、ばあいによっては死滅を余儀なくされる。

考察の対象としている時代には、国家や民族という概念はまだ発達していなかった。自分が何国人であるか、何語を話しているのかというのは、一部の為政者とそれを取り囲む人々は別として、当時の一般の人々の意識にはなかったのである。したがって、国境という概念もない。船に乗って航海していると、あるところで突然国境を越えて、別の国に入るという意識がない。この点に留意したうえで歴史を扱わなければ、誤解を生じる恐れがある。

2.3 海賊

はたして倭寇は一口に「海賊」と言い切ってもかまわない集団だったのか。3でみるように、初期の倭寇は沿海部や島を襲い、食糧（米や麦）を奪い、人々を拉致する襲撃・略奪・海賊行為が主な目的であったのは事実である。しかし、時代が下るにつれて倭寇の性格が徐々に変化していく。明朝のなかば頃から富と力を蓄えた中国の商人の中には、「海禁」（後述）を破って秘かに海外との密貿易にのりだす者もうまれた。彼らは、海上や島陰など人目につかない場所で他国人と交易を行ったが、平和裏に商談が成立しない場合には、ときとして暴力に訴えることもあった。その一部の者たちが後期倭寇の中心となっていった。

松竹秀雄（1990）は「寇と商は同じく是れ人なり。市通れば即ち寇変じて商となり、市禁ずれば即ち転じて寇となる」という中国の諺を紹介している。ここでいう寇は海賊であり、商は商人で、市は貿易の意味である。したがって、倭寇を「武装海上商人」と見る研究者もいる。田中優子（1995）は倭寇を「海上の集团的遊行民」と呼んでいる。

3. 前期倭寇

海のあるところでは世界のほとんどの地域で古くから海賊が活躍し、一部の海域では今日でも海賊の活動が続いている。東シナ海では、遣唐使の時代以降海賊の活動が目立つようになったといわれている。一例をあげると、山田吉彦（2006）は、1019年にはロシア沿海州から女真族の海賊船50隻が対馬、壱岐、松浦などに侵入し、多くの人を殺害し、1000人を超える人を拉致するという事件が起きたと指摘している。

倭寇の始まりはいつごろなのかについては、様々な見方がある。これは「純粹の」海賊と倭寇との境界線があいまいなことにもよる。「寇」がどの程度の行為を指すかという解釈によって境界が異なってくる。また、倭寇に関する日本の資料は乏しく、中国や朝鮮の資料に頼らざるを得ないという事情もある。14世紀なかばとする見解が多いが、筆者の手元にある限られた資料の中に13世紀前半とする説もある。

3.1 松浦氏

平戸の松浦史料博物館が発行している『史都平戸一年表と史談』には次のような一節がある。

倭寇は鎌倉時代1226年、松浦党の水軍が海上貿易を朝鮮に妨げられたのに対する報復として高麗沿岸を侵したのが初めてであるが、当時海外を刺激することを警戒していた幕府は、その主犯たる松浦党の武士90名を処刑したこともある。

山田吉彦（前掲書）は、藤原定家の日記『明月記』（1226年10月17日の項）に次のような記録があると紹介している。

鎮西の凶党等、松浦党と号す。数十艘の兵船をかまえ、彼の国（高麗）の別嶋に行きて合戦、民家を焼亡し、資材を掠め取る。

ここで、この松浦党について少し触れておきたい。松浦家の始祖は嵯峨天皇の第18皇子である融とされる。832年に源性と家紋「三星」を賜り、臣下に下り、872年には左大臣に任命されている。「河原の左大臣」として知られた人物である。源融の8代目にあたる久は、1069年に荘園の管理にあたる御厨検校として肥前松浦の今福に下り、姓を「松浦」に改めた。ついで、検非違使を命じられ、上下松浦郡・彼杵郡の一部および壱岐を手中に収める。1096年には、伊万里湾口に梶谷城を築き、徐々に力を蓄えていく。平安時代の貴族社会が乱れ、相次ぐ内乱で朝廷が弱体化するなかで、肥前松浦では血縁・地縁を通じて多数の集団が結束し、九州北西部沿岸を支配下に置いていく。しかし、松浦地方は平地がほとんどなく土地は痩せているので、古くから住民たちは海を頼りに生きるほかはなかった。

中国の古い歴史書『三国志』（倭人¹⁾のなかに次のような記述がある。

又一つの海を渡り、千余里にして末盧国に至る。四千余戸有り。山海に浜して居む。草木茂り盛えて、行くに前人〔の影も〕見えず。魚・鰻を捕らうることを好み、水は深淺と無く、皆、沈没して之を取る。

「末盧国」とは松浦地方を指す。この地方の人々の暮らしぶりについての記述が続く。「山が海にせまっているので沿岸すれすれのところに家を造って住んでいる。草や木が繁っており、道に行く前に行く人が見えないほどである。魚やアワビを獲ることが好きで、海の浅い深いを気にせず、人々はみなもぐって獲っている」。この地方の人たちは耕す土地が少ないので、食糧が不足すると船に乗って近くの島へ出かけて調達していた。ときには諍いが生じることもあったであろう。壱岐や対馬でも同じような状況であった。

蒙古襲来以前は、松浦の武士たちがしばしば徒党を組んで朝鮮半島へ行き、平和な貿易を望んだが、相手の出方によっては略奪、暴行も辞さなかった、と白石一郎（2004）は指摘している。これが倭寇と呼ばれる武装集団の始まりとなっていた。

前期倭寇の略奪品は、上にも述べたように食糧と人民であった。捉えた人々（「被慮人」）

1) 藤村明保・武田晃・景山輝國（2010）による。以下、いちいち断らないが、中国の正史については、同書を参考にした。

は、倭寇が奴婢として自分の手元で使役するか、あるいは対馬・壹岐・北部九州で奴婢として売る。そのなかには、はるか琉球にまで転売された者もいた。さらに、捕虜送還という名目で見返りに金品を受け取ることも行われていた。

3.2 蒙古襲来以後の倭寇の活動

この倭寇の活動が本格化するのには蒙古襲来²⁾の後である。そのため前期倭寇の始まりを13世紀末や14世紀とする歴史学者が少なくない。それまでは倭寇ではなく、単なる襲撃者・奪略者・海賊であったという見方である。

文永の役（1274）と弘安の役（1281）と呼ばれる2度にわたる元の襲来の結果、鎌倉幕府の基盤は大きく揺らいだ。もはや、朝廷や幕府の統制は遠く離れた地方にまで及ぶことができないう状態になっていった。

二つの役に甚大な被害を被ったのは、戦の舞台となり元軍³⁾に土地を踏み荒らされた松浦党である。大きな人的被害を受けながらも、善戦奮闘したにもかかわらず、自分たちの領地は自分たちで守るのが当然であるとして、幕府の恩賞からは除外された（白石一郎、前掲書）。これを不服とした松浦党は代表を鎌倉に送り、交渉に努めたが、満足できるだけの恩賞は与えられなかった。ここに至って、彼らは鎌倉幕府を見限り、自らの力を蓄えることに努める。松浦党は鎌倉末期から室町時代にかけて一層結束を固めていくことになる。鎌倉末期には、48の分家があり、現在の佐賀県東部から長崎県五島列島までの沿岸部一体にその勢力が広がっていた（山田吉彦、前掲書）。この松浦家については4.5で再びふれるが、16世紀後半には南蛮貿易にかかわることになる。

文永・弘安の役以降、松浦党だけでなく西日本沿岸の中小領主や海民たちが朝鮮半島や中国大陸沿岸に出没し、食糧や財貨の略奪、さらに人民の拉致などの海賊行為を繰り返すようになった（仲尾宏、2007）。

山田（前掲書）は、蒙古襲来の後に朝鮮半島襲撃が本格化した倭寇の主な目的として次の三つをあげている。

1. 敵状視察

元の再来襲に備えるために朝鮮半島や中国沿岸部の動静を把握し、領土を防衛する。事実、元は日本への3度目の出兵を計画していたが、1294年1月にフビライが死去したため計画は断念された。

2. 復讐

2) 「蒙古襲来」を「元寇」と呼ぶことがある。しかし、この名称は、村井章介（1999）も指摘するように、対外危機の深まる幕末から明治維新の時期に広まった用語で、日本を「神風」に護られた「神の国」と位置付け、明治以降の歴史教育の中で国家意識の高揚に用いられ、やがては戦争への思想動員に利用されたという歴史があるので、本稿では、あえて「蒙古襲来」と呼ぶことにする。

3) 元の派遣した軍は、モンゴル人だけでなく、支配下にあり従わざるをえなかった高麗や滅亡した南宋の兵（漢族）で構成されていた。

蒙古襲来では、兵士だけでなく多くの女性や子どもまでが殺された。その復讐心から倭寇に加わった日本人も少なくなかった。松浦地方では多くの人々が殺されたために労働力が不足していた。そこで朝鮮半島を襲い、誘拐した村民を連れ帰り復興のための労働力として使役した。

3. 略奪

時が経つにつれて、復讐の気持ちも和らいでくると、倭寇は東シナ海沿岸部で貿易に力を入れるようになった。しかし、商談がうまく進まないときには武力を行使し、強制的に貿易を行った。

3.3 朝鮮半島を襲う倭寇

1350年2月に倭寇が高麗慶尚道の固城・竹林・巨済を襲った。『高麗史』は「倭寇の侵、此に始まる」と記述している。村井章介（1999）によれば、朝鮮では後年、この年の干支をとって「庚寅こういん以来の倭族」という成句ができたという。しかし、これまで述べたように、倭寇はその100年近く前から朝鮮半島を襲撃している。なぜ、1350年なのかという疑問が残る。この時期になってやっと高麗王朝が倭寇の目に余る行動に注意を払い始めたということであろうか。

高麗王朝（936～1392）の歴史を振り返ってみると、それまでは国内に様々な問題を抱えており、都から遠く離れた南部の沿海部や島々での出来事に関心を向ける余裕がなかったのかもしれない。初期の倭寇が出没し始めた頃は数回にわたるモンゴル⁴⁾の侵攻（1231～1259）を受けており、1259年4月にモンゴルに降伏したあと、1270年には開京に遷都したが、すでに見たように2度にわたる蒙古襲来(1274, 1281)のときには参戦を余儀なくされた。

ともあれ、1350年以降、倭寇の活動が急速に活発化したことは事実で高麗もこれを看過できなくなった。この時期の日本は南北朝時代（1336～1392）で国内が混乱しており、中央政権が西方の周辺部にかまっている余裕はなかった。中央の統制が緩むなかで、倭寇も活動がしやすくなったのである。

高麗は日本との外交交渉で問題解決をはかろうとして、1367年に使者を送り、室町幕府に倭寇の禁圧を求め、1370年代にも数回にわたって使者を派遣しているが、幕府は効果的な対処法を持たなかった。

3.4 倭寇の中国への侵出

勢力を拡大した倭寇は、1350年以降中国へも積極的に侵出するようになった。それまでは主に壱岐・対馬を拠点に朝鮮半島南部を侵略していたが、1358年から1363年にかけて倭寇が山東に現われ、毎年のように沿海部を襲うようになったと『元史』は伝える。黄海沿岸から

4) モンゴル（蒙古）が中国に確立した国家の国号を「元」と定めたのは1271年である。

次第に南下し、1370年には福建にまで及んでいる。このとき、明軍は倭寇船13艘・300余名を捕獲している（宮崎正勝，2011）。

この時期の中国では、モンゴルの内部抗争から元が衰退し、1351年には紅巾の乱が起きており、倭寇の侵出を防ぐ余裕はなかった。当時の状況について、もう少し視野を広げると、14世紀はユーラシア大陸に自然災害が相次いだ世紀であった。1310年代から1380年代までの約70年間、ユーラシア大陸全体に異常気象・天災・飢饉・地震などが続き、かつては広大な版図を誇ったモンゴルはその影響をまともに受けるはめに陥った（尾形・岸本，1998）。元は天災・飢饉・疫病に見舞われ、政治の腐敗とインフレの結果、社会不安が増大し、各地で農民暴動が発生した。紅巾の乱に乗じて天下を取ったのは、貧農出身の朱元璋であった。

3.5 明朝初期の倭寇

元末明初の中国は政治的混乱期にあった。1368年1月、明朝（国号は「大明」）を開き南京に都を移した朱元璋（洪武帝）の大きな課題の一つは国内の反明勢力が北方へ逃れたモンゴル人（北元）や倭寇と結びつくるのを防ぐことであった。当時、明州（1381年に寧波と改名）^{ニンポー}・紹興・杭州・松江・通州・泰州を根拠地していた張士誠（1367没）の残党や、温州・台州などを根拠地としていた方国珍（1374没）とその一味の反明勢力は海賊として活躍しており、このままではすでに福建沿海部にまで侵出している倭寇と中国海賊が結託するのは時間の問題であった。明は沿岸の民衆が海上勢力と連携することを警戒した。洪武帝は日本に対して朝貢を求めると同時に倭寇の禁圧を要請する使を派遣しているが、この点については、次節で詳しく述べる。

1371年には海禁令を発している。『広辞苑』（第6版）によれば、「海禁」とは「『下海通蕃の禁』の略。明・清代、民間の海外渡航・海外貿易などに制限を加えた政策」である。具体的には、大都督府（軍事上の最高機関）に命じ、沿海の軍衛に海外との交易を禁じるというものであった。もちろん、倭寇や外国勢力の襲撃に備えて沿海の防備を強化し、住民を守ることが第一である。1374年には泉州・明州・広州の市舶司⁵を閉鎖し民間による交易や往来を禁止した。交易は朝貢貿易のみを認めることとし、来貢してくる国を制限し⁶、勘合分冊を与え、この勘合符を所持する朝貢船のみを受け入れることとなった。洪武帝時代には次々と制限が厳しくなり、1397年の「大明律」では、違法海外渡航を防止するために帆柱が2本以上の大型船の建造を禁止し、輸出禁止品を積載して外国にでかけて交易することや海賊と

5) 海外貿易に関する業務を担当する機関・役所

6) 琉球では1326年から「三山時代」と呼ばれる時代が始まり、1429年の琉球王国（第一尚氏王朝）による統一まで、三つの王統が並立していた。その一つである、浦添を中心とする中山の察度^{シヤウ}が1372年に建国間もない明朝に初めて入貢した。残りの二つの王統のうち山南の承察度^{シヤウ}は1380年に、山北の帕尼芝^{パニシ}は1383年に相続して入貢した。明王朝はこれを歓迎した。偽装朝貢使まで現われるに至って、1394年明が諸外国と往来を断ったあとも、琉球・暹羅（シヤム）・真臘（カンボジア）だけは優遇した（松浦章，2003）。琉球王朝誕生後も緊密な関係が続き、中国の政権が清に変わったあとも、明治政府による「琉球処分」（1879）まで良好な関係が維持された。

結託することを禁じた（松浦章，2003）。

3.6 「日本国王良懐」

前節で明が日本に使を派遣したと述べた。洪武帝は即位した1368年の11月に最初の使者を派遣したが、この使は九州で殺されている。

翌1369年に使者・楊載^{ようさい}ら7名が携えてきた国書の内容は、倭寇の鎮圧と朝貢を要求し、従わない場合には武力に訴えて成敗するという威嚇の文書であった。一行は大宰府に到着し、後醍醐天皇の皇子である懐良親王^{かねよし}を日本の国王とみなして国書を差し出すが、先年の蒙古襲来の苦い経験もあって親王は国書を受け入れなかった。7人のうち5人が殺害され、楊載はしばらく拘留されたのち帰国を許された。

洪武帝は1370年には3度目の使者・趙秩^{ちようちつ}を派遣する。彼は楊載を伴って大宰府を訪れる。趙秩は「明とモンゴルはまったく違う」と説明に努めたので、懐良親王は明にたいして臣下として上表文をしたためた。

1371年には懐良親王の使節として僧徂来が明に渡り、10月14日に南京に到着した。洪武帝は親王を「日本国王良懐^{りようかい}」として冊封する。

ところで、なぜ懐良親王が大宰府におり、日本国王を装ったのであろうか。当時は南北朝時代の内乱期であった。後醍醐は南朝の天皇である。室町幕府は北朝側を担ぎ、南朝側は次第に追いつめられていた。その中で九州だけは例外で、懐良親王が地元勢力に担がれて1361年に大宰府を奪取し、「征西将軍宮^{せいせいしようぐんのみや}」と呼ばれ、九州全域を勢力範囲に収めていた。

この間の事情は村井章介（1999）に詳しいので、以下その内容を紹介する。明は、親王が日本全体の支配者ではなく、九州の支配者にすぎないと知りながら、倭寇の脅威を取り除くために、あえて日本との国交樹立を急いだ、と村井は指摘している。親王を担いだ九州の武士たちは、「幕府の支配系列から九州地域を離脱させることで自分たちの利益をはかり」、親王もそれに応える姿勢を示していた。冊封関係を結ぶと、王として対明貿易を独占できるという魅力があった。さらに懐良にとっては、もっと差し迫った動機があった。徂来が使者として南京に向かった頃、室町幕府（3代将軍足利義満）によって九州探題に起用された今川了俊の軍勢が九州に向かっていた。幕府軍への軍事的対応を迫られていた懐良は「冊封を受けることで明を軍事的なうしろ盾としようとしたのではないか」と村井は言う。

さて、今川了俊の軍は1371年暮れに関門海峡を渡り、72年4月に大宰府とは目と鼻の先にある博多を占領する。5月末に洪武帝の詔書を携えた仲猷租闌^{ちゆうゆうそせん}と無逸克勤^{むいつこくごん}の二人の使僧が博多の港に到着した。了俊はただちにこの使節を聖福寺^{しょうふくじ}に拘留したのち、8月に大宰府を攻略した。この出来事を目の当たりにした明使は、もはや権力を失った懐良親王ではなく、室町幕府・北朝に交渉相手を切り替えようと決断する。

3.7 「日本国王源道義」

拘束をとかれ、1373年6月末に上洛した仲猷租闌と無逸克勤は幕府との交渉に成功した。幕府は明使の帰国に際し、禪僧の聞溪円宣・子建浄業らを使者として同行させた。また、政府の実力と誠意を示すために倭寇の捕虜になっていた150人の中国人を送還した。これが室町幕府の最初の遣明使である。

1374年6月に一行は南京に到着した。しかし、洪武帝は彼らの持参した書面が国王が臣下として皇帝に奉る「表」ではなく、「国臣の書」にすぎないとして使者を追い返した。外交の秩序を重んじる明は、いったん懐良親王を「日本国王」に冊封した以上、これを簡単に取り消すわけにはいかない。

1380年、足利義満は「征夷將軍源義満」の名で再び明に使者を送るが、また退けられた。彼はしばらく明との交渉を中断して、まだ混乱の続く国内の体制固めに励む。大内義弘の和平工作もあって、1392年には南北朝が統一された。

一方、晩年は外交に消極的になっていた洪武帝は1386年には日本との断交を宣言した。1398年に洪武帝は死去し、嫡孫の允炆が即位した。建文帝である。

義満は1394年に將軍職を辞し、太政大臣になったが、それもわずか半年で出家して「道義」という法名を名乗った。しかし政治から手を引いたわけではなく、逆に出家することによって公家と武家の両方の上に立つことになった。

室町幕府は直轄地が少なかった。そこで博多商人の肥富が明との貿易の利点を義満に述べて日明間の通交を進言した。天皇あるいは法王の座を狙っていたといわれる義満は中国皇帝に自分の支配の正当性を認めてもらうという思惑もあり、そのためには朝貢もいとわないという覚悟であった(宮崎正勝, 2011)。

1401年、義満は肥富と僧租阿そあを使者として明に送った。このときも「海島漂寄の者」(倭寇の捕虜になった人々)を送り返している。門前払いになった過去の失敗を繰り返さないように応永8年5月13日付の建文帝あての書面には「日本准三后道義、書を大明皇帝陛下に上る」と書かれていた。「准三后」とは「皇后・皇太后・太皇太后に準ずる」の意で、天皇に次ぐ位であることを表す。義満は、すでに1383年に26歳の若さでこの称号を得ていた。翌1402年、建文帝は南京に到着した使者を歓待し、義満を「日本国王源道義」とする詔(建文4年2月初6日付)を与えている。義満は、9月5日に北山殿でこの詔を明の使僧から受け取っている。

1403年には、貿易交渉を詰めるために「日本国王源」と称して、使者(正使は堅中圭密)を明に送った。ところが、使者が南京に到着してみると、建文帝は前年の6月に叔父・燕王が起こした政変によって皇帝の座を追われ、新しい皇帝に代わっていた。16歳で即位した建文帝は強大な軍事力を持った藩王たちの勢力を削ぐと務めた。これに危機感を抱いた燕王は1389年に早々と先手を打って反旗をひるがえしていた。建文帝は追いつめられ自殺したと伝えられているが、戦火に包まれた宮城の焼け跡からは皇帝の遺体が発見されなかったため

に、民間では皇帝が僧侶に身をやつして逃げのびたという噂が広まったという。燕王は永楽帝としてただちに即位した。そして、建文帝の在位と年号は存在しなかったものとして処理され、建文4年は洪武35年と変えられた（「靖難の変」）。

事前に建文帝が不利な状況にあるとの情報をつかんでいた義満は手ぬかりなくあらかじめ建文帝あてと新皇帝あての2通の書を使者に持たせていた。堅中は永楽帝あての表を差し出した。これに対し、永楽元（1403）年11月、永楽帝は「帰嚮の速やかなる、褒嘉するに足るあり。用て印章を賜う」。この年には、1374年に閉鎖された泉州・寧波（旧称「明州」）・広州の市舶司が復活し、泉州（のちには福州に移る）は琉球の朝貢船が、寧波は日本船が、広州には東南アジアの朝貢船が出入りするようになった。なお、高麗（のちに朝鮮）は鴨緑江を越えて遼陽を経て山海関から国都に至る陸路が割り当てられていた。

翌1404年、日本から禅僧明室梵亮を正使とする最初の勘合船が渡明した。この勘合貿易は中断期を挟みながら1547年まで続いた⁷⁾。日本からの輸出品は銅・硫黄・金・刀剣・扇・漆器などで、輸入品は生糸・絹織物・綿糸・砂糖・陶磁器・書籍・絵画・明銭（銅貨）などであった（佐藤信他，2008）。この貿易は1411年までは幕府が直接経営していたが、中断期以降は、幕府以外に有力守護や寺社が参加する公船や細川氏と組んだ堺商人や大内氏と組んだ博多商人の私船が参加した。

3.8 朝鮮半島

ここで舞台を朝鮮半島に移す。時代も少し遡って、1375年頃、高麗は藤経光という名の倭寇の頭領をだまし討ちにしようとしたが、この計画が漏れてしまった。これを境に倭寇は女・子どもまで皆殺しにするようになった、と『高麗史』は伝える。

1380年代になると高麗の軍勢力が整備され、倭寇はしばしば大敗を喫するようになる。この倭寇との戦いで功績をあげ、名声を高め、朝廷内での重みを増した武将が李成桂であった。当時、高麗では北元と組んで明を攻撃する計画がうまれた。李は軍を率いて鴨緑江まで進んだが、高麗軍には戦意がないことを悟り、引き返して首都に向かい、高麗の恭讓王を廃し、王子をたて自ら政権を握った。1392年、部下に推されるかたちで王位につき（太祖）、国号を朝鮮と改めた。太祖も明の洪武帝と同じように室町幕府や九州探題に倭寇の鎮圧を求めた。

1404年7月、義満は使節を朝鮮に派遣し、両国の善隣関係を樹立した。以後1590年まで両国の使節が行き来していた。

同じ年に、明の永楽帝が朝鮮国王を冊封した⁸⁾。これによって東アジア3国間に安定した

7) 足利義満の死後（1408.5.6）、朝貢形式は屈辱外交であるという非難があり、義満に不満を抱いていた4代將軍義持は、明に臣礼をとることを嫌って1411年来日した明使・王真を兵庫から追い返し、これによって勘合（符）貿易は1432年まで中断される。この21年間の空白期に倭寇の活動は活発化する。

8) 琉球が明との冊封体制に組み込まれたことは、注6で触れたが、朝鮮半島との交易は1389年に察度王が使者を派遣し、倭寇に捉えられていた人を送還し、南方産の素朴や胡椒などを献上したことで始まった（新城俊昭，1997）。1414年には室町幕府と琉球の通交も始まった。

国際関係が実現した。この関係は16世紀なかばまで続く。1405～31年には、永楽帝に仕える宦官・鄭和によって7回にわたる南海大遠征が行われ、東南アジア、インド沿岸、ペルシア湾岸、アフリカ東岸、インド洋沿岸の10数か国が明と冊封朝貢関係を結ぶ。しかし、東シナ海では倭寇の活動が活発に続く。

1418年に飢饉が対馬を襲った。食糧に困った島民が朝鮮の忠清沿岸を襲った。1419年、朝鮮王朝の上王太宗は倭寇の根城となっている対馬の征討を決意し、第4代王の世宗が軍船200隻・1万7千の兵を派遣して侵攻させた。対馬の宗貞盛はなんとかこれを撃退した（日本では「応永の外寇」と呼び、朝鮮では「^{きがい}己亥東征」と呼ぶ）。しかし、これをきっかけに日朝両国間の関係が一時険悪になった。翌1420年には朝鮮使節・^{ソンヒギョン}宗希環が対馬・博多を経由して京都を訪れ、朝鮮への報復攻撃を考えていた4代將軍足利義持に対馬攻撃について釈明し、講和が成立した。

参考までにここに書き加えておくと、同じ1419年には、中国で遼東の^{ほうかい か}望海峯を襲った倭寇が明軍によって壊滅的な打撃を与えられるという出来事があった。

15世紀なかばの倭寇は、「倭人は一、二に過ぎずして、本国の民、仮に倭服を着て党を成して乱を作る」と『世宗実録』（1446年の条）は述べている。この数字をそのままに受けとめることは控えるが、このころには朝鮮半島の民衆が日本人と組んでいたことがわかる。

3.9 前期倭寇の沈静化

応永の外寇と望海峯での敗北以後は、倭寇は沈静化したといわれている。それは朝鮮のアメ（^{きび}羈縻政策）とムチ（討伐）の政策が功を奏したためとされている。たとえば、世宗は1438年に、対馬から海賊を出さないことを条件に「^{ぶんいん}分引」の発行権を島主・宗氏に与えた。分引とは、宗氏が身元を保証する書状で、これを持参する者は「良民」とみなして、明との貿易を許すという一種の渡航証明書であった。

沈静化といっても、倭寇の襲撃がまったくなくなったわけではない。1421年には中国へ向かう琉球の朝貢船が倭寇の船20隻に襲われ、武器がなかったため皆殺しになるという事件が発生したことが記録されている。佐伯弘次（2011）は、1443年に明の使者が来日し、義教に対し「賊船」に捉えられ、日本各地に散在している明人をすべて中国に帰すように要求したと述べている。

15世紀の後半になると、倭寇のなかの倭人の割合は次第に小さくなっていく。その一例をみると、『李朝実録』の1482年の条には、「^{なら}濟州人民沿海諸邑を流寓す。既に附着無く、又禁防無くして自由に入出入りす。或は倭人の言語・衣服を倣い、^{ひょうせつ}海島を往来して潜かに剽竊を行う」と記されている。濟州島の民衆が倭寇に加わったのは、もっと前のことだと思われる。

この時期に出没し始めた「水賊」は倭人なのか、朝鮮人なのか。朝鮮官憲は、^{さんぽ}三浦の恒居倭人⁹を疑っていた。そのことが^{チエポ}三浦倭人の怒りをかった。1510年4月4日、^{チエポ}齊浦・釜山浦の倭人が対馬の代官同盛親の指揮する援兵を得て大規模な暴動を起こすが、失敗に終わった

(三浦の乱)。この事件をめぐって対馬と朝鮮の関係は断絶に至った。

この頃から、前期倭寇の活動に関する情報は現存する資料のなかから消えていった。しかし、やがてもっと大きな倭寇の波が東シナ海に帰ってくる。

4. 後 期 倭 寇

16世紀になると、明朝は北方での戦いに経費がかさみ、海禁政策は次第に緩み、民間商人による密貿易が盛んになってくる。彼らは、あるときは地元の役人などの有力者とひそかに結び、海外交易に出かけていく。生命と積み荷の安全のため海賊と結託し、やがては商人自身が武装するようになっていく。一方、日本の勘合貿易の中断期（1411～1433、その理由については注7を参照）には倭寇の活動が活発化するが、室町幕府も西日本の海上勢力を統制する力を失っていく。こうして中国人の密輸業者と九州の海上勢力が一体化して、東シナ海域で密貿易に従事し、ときには略奪・海賊行為も辞さなかった。これが後期倭寇である（中島楽章，2011）。

当時はいわゆる大航海時代で、ヨーロッパ人がアジアに進出し、中国や日本にまで手を伸ばそうとしていた。彼らの一部もまた倭寇と組んで活動した。16世紀なかばは後期倭寇の活動の最盛期であった。

4.1 徽州商人

明朝にとって大きな悩みの種は、北方のモンゴル人と南方の倭寇であった。「北虜南倭」と呼ばれている。元朝の滅亡（1368）によってモンゴル勢力が減じたわけではなく、彼らは北方周辺に後退しただけで依然大きな力を維持していた。彼らはしばしば華北に侵入して朝廷を悩ませた。時代は少し飛ぶが、1550年にはアルタンが率いるモンゴル軍が8日間にわたって北京を包囲し、周辺部で略奪放火を欲しいままにするという事件が起きている（庚戌の変）。

一方、15世紀に朝鮮半島や中国北部の沿海を荒らしまわった倭寇は16世紀になると、南下して江南で活動を始めた。明朝は北に「北虜」（モンゴル勢力）、南に「南倭」（倭寇勢力）という問題を同時に抱え込んだのである。

明は、北方防備のため長城を修築・整備して九辺鎮（九つの軍管区）を置き、大量の軍兵を配備した。この軍隊を養うための食糧調達は大問題であった。永楽帝の時代に首都を南京から北京に遷す（1421）とともに、物資を運ぶために大運河を北京にまで伸ばした。当初、政府は民間人に軍の食糧の運搬を請け負わせ、その見返りに塩の専売権を与えた（開中法）。

9) 15世紀初め、朝鮮半島に多くの日本人が渡っていた。そこで3代朝鮮王・太宗は1426年に日本人の入港地を3か所に制限し、それぞれに倭館（接待所兼商館）を設置した。その三つの港とは、富山浦（現・釜山）、齊浦（のち乃而浦と改名、現・熊川）、塩浦（現・蔚山）で、これを「三浦」と呼んだ。当初は日本からの渡航者が交易のために一時的に滞在することに定められていたが、次第に現地に住みつくようになり、この定住日本人は「恒居倭（人）」と呼ばれた。

当時、塩は高価な貴重品であった。その役目を担ったのは比較的北辺に近い山西や陝西の商人であった。しかし、大量の食糧を遠くまで運ぶのは大変な労役で商人たちは嫌がった。そこで、1492年には商人は銀を国庫に納め、塩の販売権を得るという方法に開中法が改められた。商人から収められた銀と農民から土地税として収められた銀を国庫に納め、政府はこの銀を九辺鎮に運び、現地での軍糧購入資金に充てるようになった。このように、明では15世紀の後半から税や徭役の銀収化が進む。やがて、国内中の銀が不足するという事態に陥るのである。

この開中法の改革によって、塩の生産地に近い地域の商人が塩の販売に新規参入することが可能になった。この機会をのがさなかったのが徽州商人である。徽州は安徽省にあり、内陸部ではあるが、河川と運河で近海ともつながっている。塩の販売で利益を得た徽州商人は事業を拡大し、薬剤・綿製品・陶磁器・木材の取引などに乗り出し、大量の銀を稼いだ。徽州が栄えるに伴って江南では至る所に市鎮（市場町）が発展した。南京・潮州・杭州では高級絹織物業が発達し、農村の副業（家内手工業）として綿織物が作られた（張士陽，2011）。潮州商人は、河川・運河などの水易ルートを活用し、長江下流の南京・揚州・杭州や華南の広州、華中の漢口、首都北京、華北の臨清などに商業拠点を広げていった。

この頃、日本からの遣明船は寧波に出入りしていた。寧波は日本の勘合貿易船に許されていた唯一の交易港であった。遣明船は主として生糸を購入し銀で決済する。1530年代になると、日本では朝鮮から伝わった灰吹法の導入によって銀の産出量が急増する。この寧波は徽州からは川と運河を利用すると簡単に行くことができる。国内長距離交易に従事する徽州商人にとっては、銀が手に入る日本との交易が魅力的に映ったのではなかろうか。やがて、次節で述べる「寧波の乱」をきっかけに、徽州商人のなかにも江南デルタの生糸・絹・綿布・陶磁器（特に景德鎮は有名）などの密貿易に手を染める者が現われる。

4.2 寧波の乱

1523年、寧波で日本の朝貢船同士の騒動が発生する。室町幕府はすでに弱体化し、自ら遣明船を派遣するだけの経済力も失っており、幕府に変わって大名や有力商人が朝貢船を派遣していた。

4月27日、博多から出発した西国大名・大内義興よしおきの後援する遣明船3隻（乗員300余人）が寧波に入港した。正使は謙道宗設けんどうそうせつである。少し遅れて堺から守護大名・細川高国の後援する遣明船1隻（乗員100余人）が到着した。この船の正使は鸞岡瑞佐らんこうずいさで、福使は宋素卿そうそけいであった。

後からやってきた細川船の宋素卿が寧波市舶使の太監・頼恩に賄賂をおくり、細川船の扱いを優遇させるように取り計らった。そこで大内船の謙道が怒り、細川船に火をつけた。これに対し、明官憲は細川側に武器を与えて援助した。謙道は鸞岡を殺害した。宋は逃げたが、彼が寧波人であつて事件を起こし日本へ逃亡したことが判明し、明官憲に捕えられた（のち

獄死)。

この一件で、明朝は、両方の遣明船を追い返すとともに、日本からの入貢を禁止し、貿易を統制する寧波の市舶司も廃止された。こうなると、日本との密貿易を謀る者が出てくるのは容易に想像できる。

4.3 密貿易の拠点・六横島

1492年にヴァスコ・ダ・ガマが喜望峰を經由してインド西岸のカリカットに到着した。これを契機に、ポルトガルはアジア進出をきめ、1510年にはゴアを占領、さらに東に進み1511年にはマラッカを占領する。マラッカはインド洋海域と東南アジア海域を結ぶ東西貿易の中継地・香料貿易の中継地であり、当然中国南部の船も出入りしていた。ここを拠点としたポルトガルは、香料貿易の独占をはかるとともに、1517年に中国への進出を試みたが、明は正式の通交を拒絶したので、当面は手の打ちようがなかった。と、ここまでは表の歴史の話である。しかし、その裏では、ひそかに中国に入り、交易を行ったポルトガル商人もいた。

小さな地図では見つからないが、寧波から外海への出口に大小無数の島からなる船山諸島がある。ちなみに、小学館の『中日辞典』(第2版)によると、1339の島からなる。その一つが六横島^{りくおうとう}である。斯波義信(1995)によると、1525年に廈門(アモイ)のお尋ね者で海賊の親分である鄧獠^{とうりょう}がマラッカやパタニに渡り、ポルトガル人らを六横島に招き寄せた。1526年に鄧獠は六横島の双嶼^{リャンポー}を密貿易港として開き、ポルトガル商人との密貿易を始める。やがて島にはポルトガル人が定住して集落をつくるようになり、彼らの家が約1000軒も建てられ、医院やカソリック教会二つ、それに市庁舎まで建築されたという。当時の島の人口は3000人余りであったが、そのうちポルトガル人は約1200名であった。双嶼港には日本人・ポルトガル人・東南アジア人が集まり、「東シナ海の大貿易センター」(中島楽章, 2009)に成長していく。1540年頃の双嶼でのポルトガル人の商取引は300万両超であった(小山正明, 1995)。

鄧獠の下には、福州人の李某、徽州人の許四兄弟(松・棟・楠・梓^{しょう・とう・なん・し})のほかには浙江、福建、広東の大海賊の首領がいた。彼らの活動範囲は東南アジアから日本にわたり、許兄弟が日本の海賊と通じていたらしい。しかし、1532年に鄧獠が官軍に捕まり、1538年には許棟と李が捕まり、許梓はタイに逃げた。その後は、下っ端の王直が双嶼の大親分になったと伝えられる。

4.4 鉄砲伝来

「1543年、ポルトガル人が種子島に漂着し、鉄砲¹⁰⁾を伝えた」というのが、これまでの学

10) ここでいう「鉄砲」とは、いわゆる火繩銃である。13世紀の蒙古襲来するとき元軍が「てつほう」を使用したことは「蒙古襲来絵詞」にも描かれているが、これが元軍がハンガリーを攻めたとき西洋に伝わり、改良が加えられて火繩銃になった(川勝平太, 1996)。

「火薬を詰めた円弾を投石機で投げ出して用いることがすでに宋代に知られており、元寇の時にも

校の教科書の記述であった。筆者もそのように教えられた。しかし、これには異説があり、最近では「1543年頃に」とか「伝えたといわれている」というような断定を避けた表現も散見されるようになった。

ここでは、筆者も納得している異説の一つを紹介したい。従来、鉄砲伝来については、1606年（慶長11年）に薩摩の禅僧・南浦文之^{なんぽぶんし}が書いた『鉄砲記』がよく知られている。それによると、1543年9月23日（旧暦8月25日）に100人余りの乗船した大型船が種子島に到着した（「漂着」ではない）。その服装も初めて見るものばかりで、言葉も通じない。乗船者のなかに中国人の儒生「五峯」という姓不詳の人物が砂上において筆談し、乗船者が南蛮の商人であることが判明した。この書は、鉄砲伝来から約150年後に書かれたものであり、すべての記述が正しいとは言い難い。

これにたいして、ポルトガル人の「漂着」と「鉄砲伝来」の時期は異なっている、との説がある。たとえば、武光誠（2009）は、ポルトガルに残る記録からポルトガル人が漂着したのは1542年で、彼らが鉄砲を伝えたのは翌1453年であるという。ポルトガルの資料などによると、アントニオ・ダ・モッタとフランシスコ・ゼイモト、アントニオ・ベイショット（ベイショットとも）の三人のポルトガル人は、タイのポルトガル^{カピタン}商館長（一説には^{カピタン}船長）フレイタスの船から脱走して、中国船（ジャンク）を入手して六横島の双嶼港を目指したが、暴風雨に会い、数日後種子島まで流された（漂着）。島の人々に助けられて、船を修理して双嶼に辿りついたらしい。翌1543年8月にダ・モッタとゼイモトの二人が六横島の有力な倭寇の王直のジャンクに乗って鉄砲を伝えた。二人のポルトガル人の名前は、『鉄砲記』の音写では「佗孟太」と「牟良叔舍」となっている。「佗孟太」はダ・モッタであり、「牟良叔舍」はゼイモトのファースト・ネームのフランシスコに相等する。彼らは双嶼で調達したと考えられる鉄砲2挺を銀200両（現在の金額で約400万円）で島主の種子島^{ときたか}時亮に売ったと伝えられている。

ところで、1542年に三人のポルトガル人が種子島に漂着したという点についても、疑問がないわけではない。ポルトガルのモルッカ総督アントーニオ・ガルバンの『諸国新旧発見記』（1563）には、三人が暴風雨に遇った数日後、「東の方32度の位置に一つの島を見た」といわれている。これが北緯32度を指すとすれば、種子島よりかなり北になり鹿児島県阿久根市あたりを指す。

また、既に1543年以前に日本には鉄砲が伝わっていたという説もある。松浦氏の項（3.1）であげた『史都平戸』には、次のような記述がある。

『平戸藩史考』に1543年（天文12）相ノ浦との戦いに鉄砲を用いた如き記事があるか

これを用いたので日本軍が大いに苦しんだことは有名である」（吉田光邦，1976）

「一般に発射用に火薬を用いる方式は、中国でも明代初めのものと考えられる。それでこの方式は中国との貿易ですでに日本に伝えられていたのであろう。応仁の乱やその他16世紀はじめの日本の文献に鉄砲の字がみえるのは、中国から輸入された火砲型のもので、その筒も木製程度のものであったと思われる」（吉田光邦，同書）

ら、或は明人王直を平戸に優遇したとき既に彼の手を経て平戸には若干の鉄砲が伝わっていたのではあるまいかと考えられる。

種子島に伝わった鉄砲はわずか2挺であり、これが同じ年にはるかに離れた地で実戦に用いられることはあり得ない。すなわち、『平戸藩史考』の記述に従えば、種子島以前に鉄砲は日本に伝わっていたと考えられる。

4.5 王直と日本

上の4.3と4.4に「王直」という人物が登場している。ここで、王直について紹介する。王直については、比較的多くの文献が残っているが、断片的な記述が多く、年代的にみて明らかに矛盾すると思われる記述も少なくないので少し整理する必要がある。

王直は後期倭寇の頭目のなかで一番よく知られた人物である。彼は徽州人^{きゅう}で、歙県（現・安徽省黄山市）の生まれであるが、生年は定かでない。父親に関する情報もほとんどない。母親は汪氏といわれており、文献によっては「汪直」と表記されているのは母方の姓に由来するのであろう。彼は当初塩商人（4.1参照）であったが、商売に失敗し、同郷の徐惟学と遊民に転じ、若い頃から何人かの仲間と海外に出かけていた。やがて同郷の許棟（4.3参照）の配下となった。少なくとも1530年代の何年間かは六横島を本拠地としていたと思われる。

王直に関する様々な歴史上の資料には「1540年（頃）に～」という記述が多い。この年（頃）の彼の行動範囲はシャムから日本まで広範囲に及んでいることを表している。これらの資料を整理してみると次のような姿が浮かんでくる。

王直は廈門の葉宗満らと広州に赴き、同地で大型船を造船し、当時は輸出禁止品であった硫黄や生糸、真綿などの貨物を積んでシャムや呂宋、安南、マラッカ、日本などに出かけて、巨万の富を蓄財した。斯波義信（前掲書）を参考にして、王直が各地で購入した物品を箇条書きすると次のようになる。

シャム、カンボジア＝蘇木、胡椒、犀角、象牙

マニラ＝メキシコ銀

景德鎮＝陶磁器

湖州＝生糸

松江＝綿布

福建＝紗絹、砂糖、糖菓

これらの品を日本や東南アジアに運んで、商売を行ったのである。

ここで王直に関する国内の資料などを検討してみる。長崎歴史文化博物館の2階にある常設展パネルには、王直（塩商人）について「天文9年（1540）以降、福江の領主^{うく}宇久盛定と盛んに貿易をおこない、福江には唐人町もつくられました」という説明がある。

2011年3月に共同研究プロジェクトのメンバーと共に、五島列島の福江島を訪れ現地調査をする機会があった。そのときの話を紹介したい。

福江島の宇久盛定は倭寇の頭目・五峰（＝峯）王直との間に通商の密約を結び、居城（江川城）対岸の高台に土地を与え、王直らを居住させた。唐人町が造られ、王直らが飲料水を得ていたという六角井せいが保存されている。王直らが航海の安全を祈るために建立した廟堂跡みんじんどうの明人堂や唐人橋など当時の様子を伝える建築物がある。

このとき、筆者はかねてから疑問に思っていた点¹¹⁾を、案内してくれた山口要蔵氏に質問してみた。山口氏は我々が宿泊した民宿の経営者であるが、郷土の歴史研究家でもある。種子島で鉄砲伝来のとき、王直はなぜ自ら「五峰」と名乗ったのか。山口氏によると、1540年に王直が初めてちかのしま値嘉島（五島）に近づいたとき、海上から見えた島が五つの峰のようにみえた、そのときの印象が強く彼の記憶に残っていた。密貿易商人であるから自分の本名を明かすわけにはいかないので、五峰と名乗ったとのことである。

また、一般に鉄砲伝来は1543年といわれているが、それ以前に伝わっていたのではないかという問に対しては、もちろん五島や平戸には既に伝わっており、王直は鉄砲の弾薬に不可欠な硝石が日本では産出できないこと、したがって日本への硝石輸出が莫大な利益をもたらすことを知っていたという。それゆえ、財政難を抱えていた宇久盛久は貿易による利益をもたらす王直の来航を歓迎したのであるとの説明を受けた。とすれば、鉄砲の伝来は王直にとって日本での大きな商機であり、双嶼港から例のポルトガル人を誘って種子島に赴いたのではないだろうか。1543年の種子島への渡航は「漂着」ではなく、意図的な「来航」であったといえよう。王直は硝石貿易でも莫大な利益を得ている。

1542年、王直は平戸へ移った。平戸松浦家第25代・松浦隆信（道可）は彼を優遇し、平戸の中心にある勝尾岳の東麓に土地を与えた。王直は、そこに唐風の大きな屋敷を建てた。現在この屋敷跡には碑があるだけであるが、市内には五島の福江と同じような六角井が残っている。平戸時代の彼の手下は2000人余りで、数百隻の船団を指揮し、「徽王」と名乗っていた。これは彼が徽州人であったからと容易に推察できる。

『史都平戸』には、「(王直) 平戸に滞在すること十五年」とあるので、1557年に帰国するまで平戸に滞在していたことになる。武光誠（前掲書）は、五島列島は王直にとって密貿易の基地であり、平戸は彼の屋敷であったという。王直は五島列島を拠点として硝石貿易を拡大していった。

王直は薩摩にも拠点を置いていたことが知られている。つまり、王直は日本にいるときは平戸を居住地と定め、五島や薩摩の間を行ったり来たりしていた。王直は海外との密貿易の仲介をしたので、京や堺などの商人が多数訪問したという。また諸大名との交流もあった。『鉄炮記』に「儒生五峯」という記述があるから、王直は単なる密貿易商ではなく、

11) 五島を訪れる前に、共同研究者の遠山淳名誉教授から教えて頂き、有吉佐和子『日本の島々、昔と今。』（岩波書店）を参照すると、「王直の字が五峰とされているのは、ひょっとすると種子島の砂浜に書いたという五嶋という文字が誤読されたからかもしれない。五島は、当時は五嶋と書いた。彼は五島に問い合わせたほうがいいと島役人に告げたかったのではなかろうか」という個所があり、この点が気になっていた。

それなりの教養を備えた人物であったと思われる。彼の故郷徽州は商業の発展とともに文化も栄えた土地で、多くの教養人が生まれている。

1550年6月にポルトガル船が平戸に来航し、松浦氏の歓迎を受ける。これが我が国の「南蛮貿易」の始まりとなったが、これを手引きしたのは王直であった。すでに双嶼時代にポルトガル密貿易商人とのネットワークを築いていた彼にとっては、たやすいことだったといえる。

鉄砲の伝来とポルトガル人の来航が日本の歴史を変える大きな意義をもつことは改めてここで書くまでもないだろう。この二つの大きな出来事の裏には海商王直の活躍があったのである。

4.6 倭寇王直

王直は1540年に五島に来てから1557年に平戸を去るまでずっと日本に滞在していたわけではない。この間、王直は密貿易海商として東シナ海域を忙しく駆け巡っていた。

中国の時代区分でいう嘉靖期（1521～1566）は倭寇の絶頂期であった。これを称して「嘉靖の大倭寇」という。1522年から1566年の間に倭寇が中国東南部沿岸に侵入した回数は、記録に残っているものだけでも548回に及ぶ。

すでにみたように三浦の乱（1510）で日朝関係は一時断絶になり、寧波の乱（1523）により日明間の公式貿易はしばらく途絶えることになった。その後に派遣された遣明船は1540年と1547年の2回のみで、1551年に大内氏が滅亡すると勘合貿易は途絶えてしまった。「名ばかり將軍」の足利義輝（在位1546～65）のもとで幕府の権威は地に落ち、戦国大名が各地に割拠するようになる。国内の飢饉は米価の高騰をもたらし、方々で略奪がさかになる。

こうして東シナ海域の国家基盤や国家間の正式関係が揺らいでくると公式の貿易は衰退に向かっていく。それにかわって、16世紀のなかばから活躍するのは、密貿易に励む後期倭寇とポルトガル勢力である。前期倭寇と後期倭寇に共通するのは中央政府の統制が緩んでいた時期に活発化したという点である。

1545年、王直は博多へ行って、助才門（助左衛門）ら3人の日本人を密貿易の仲間に引き入れ、本拠地の双嶼へ連れて行く。1548年には、王直は船山諸島の馬蜻潭で日本人と密貿易を行ったという記録がある。

松浦章（2003）は王直が中国官憲から追われるようになった経緯を次のように述べている。1540年から海商王直は浙江省餘姚^{よよう}の謝氏と順調な取引関係にあった。王直は外国人商人と謝氏の間で取引をしていたが、あるとき謝氏と王直らの海商との間でおそらくは取引上のもめごとがあったのであろう、謝氏が海商らの行為を官憲に密告しようとした。そこで王直は外国人と結託し、謝氏の自宅を夜襲し、男女数人を殺害し、略奪行為を行う。恐れをなした餘姚^{しゅがん}県の官吏が上級機関に「倭寇の襲撃」と報告した。これを受けて、浙江巡撫の朱紘^{しゅがん}が犯人捕縛の命令を出す。この事件によって、王直は「海商」「密貿易商」から「倭寇」と

みなされるようになる。朱紘が巡撫に任命されたのが1548年で、この出来事を記録した『世宗実録』の日付が1549年7月5日であることから、この出来事があったのは1548～1549年頃と絞り込むことができるが、さらに1548年に明朝が密貿易の拠点である双嶼港を攻撃し、破壊しつくし、これ以後王直は拠点を移したという史実から、1548年の事件と思われる。ともかく、このころ王直は明朝の「お尋ね者」になった。

六横島の双嶼港を明軍に破壊されたあと、倭寇は同じ船山諸島に幾つかの拠点を分散した。1300以上の島があるから隠れて密貿易を継続するのはそんなに難しいことではなかったであろう。双嶼港攻撃を受けた密貿易者のうち、あるものは船山諸島の他の島へ移り、あるものは浙江・福建に移動し、密貿易・海賊行為・略奪を行う。王直は船山列島に残り、密貿易を続け、東シナ海全域の密貿易を牛耳る。

ポルトガル商人は、西に逃げ広州湾を拠点として勢力回復をはかる。のちに中国官憲に協力し、1557年にマカオを貿易拠点とすることを認められる。1550年6月に王直の手引きでポルトガル船が初めて平戸へ来航したことは上に記した通りである。

1552年4月に、倭寇が台州を襲った。その中心人物は「徽の人、汪直」といわれている（『明倭寇始末』）。

『明史』には次のように記録されている。

大悪党の汪直・徐海・陳東・麻葉のごとき輩は、日頃から倭人の中に喰い込み、（明）国内では勝手にふるまうわけにはいかないので、すべて海上の島に逃れて奸計の采配をふるった。倭人たちの言いつけに従えば、彼らを誘って（明）本土を略奪した。外海に出たこれらの大盗賊は、やがて倭人の着物や旗じるしをまねて用い、船団をいくつかに分けて本土に侵攻して略奪し、一人残らず大いに懐を肥やした。そこで、（明）朝廷で検討した結果、巡撫を復活させることになり、嘉靖31年（1552）、^{せんとうぎよ}僉都御史の王忬をこれに当てた。しかしながら、倭寇の勢力は、すでに撲滅しきれなくなっていた。

明軍は非常事態の発生で急いでかき集められた訓練もろくに受けていない兵が多く、軍船も漁船を急遽転用したものであった。明朝は倭寇の侵攻に対してお手上げ状態だったことがわかる。ここに登場する徐海は、王直と同じ徽州府歙県の出身で、薩摩・大隅地方を拠点とし、中国沿岸を襲撃した武闘派倭寇であった。彼は、数万の倭寇集団を率いて杭州湾に上陸し、江南・浙江一体を荒らしまわった（中島楽章，2009）。

『明史』は続けて「これら賊軍のあらましは、真の倭人は十人のうち三人で、残りの七人は倭人に寝返った中国人だった」と述べている。1550年代以降、倭寇のなかの「倭奴」の割合はすでに1～2割に減っていたという記録もある。

1553年には、明軍によって倭寇が船山諸島の瀝港から追われた。ここに拠点を築いたのは王直であった。彼は根拠地を五島と平戸に移すとともに明朝に対し大反撃にでる。

『明史』の記録を追っていくと、倭寇の侵攻した土地は1554年1月には太倉から蘇州、松

江、通州、泰州に、4月に嘉善、崇明、蘇州、崇徳に、6月には呉江、嘉興、拓林に、といった具合で、「縦横に來住し、無人の境に入るが若し」であった。

翌1555年になると、70人程度の倭寇が「数千里を席卷」し、中国側の死者は4000人近くにのぼり、80日余り動乱が続いたあげく、やっと滅ぼされた。

朝鮮半島に目を転じると、同じ1555年に倭寇が70余隻で全羅南道の康津・珍島一帯に侵入し、略奪を行った(乙卯倭変)。これも王直が指揮したといわれている。

『李朝実録』によれば、1556年4月1日、朝鮮で倭人が反乱を起こそうとしているという情報を入手した対馬島主・宗氏が朝鮮朝廷に報告した。首謀者のなかには中国人もおり、彼は「五峯」と名乗り、倭人を率いて明を襲撃すると称している。

前期倭寇は食糧の他に人々を捉え、これを奴隸として使役したり売却したりしたと述べた。後期倭寇はさらに大規模な奴隸貿易を行っている。中国東南部の江南・浙江。福建などを襲撃し人民を拉致した倭寇は対馬・松浦・博多・薩摩・大隅などの九州地方で奴隸として売却した。これらの奴隸は、牛馬の飼育や薪取り、水汲みなどの仕事をさせられた。さらに彼らの一部はポルトガル商人によってマカオに転売され、そこから東南アジア・インドに送られていった。

嘉靖期に暴れまわった倭寇であるが、王直自身にも心境の変化が起きたようである。生年が不詳なので年齢は定かでないが、少なくとも老境に入らんとする頃であろう。1557年、浙江総督・胡宗憲が王直の母と妻子を杭州に呼び止め、王直に帰国を促す手紙を出す。明朝に帰順して海賊禁圧に協力すれば、彼が船山列島で貿易を行うことを公認すると持ちかけた(中島楽章, 2009)。明朝から派遣された蔣州と陳可願の二人が五島で王直と話し合っている。王直はこの提案を畏であるかと思いつつも、帰国に同意する。「故郷忘じがたし」という心境であったのだろう。同年10月、中国に帰る。案の定、王直は拘留された。胡宗憲自身は王直の帰順を認めるつもりだったといわれている。しかし、明の朝廷の強硬論におされ、1559年12月、王直を処刑せざるをえなかった。

武光誠(2009)は「王直は明朝ではお尋ね者だったが、日本では貿易の利益をもたらすありがたい客人として扱われたのである」と評している。

4.7 その後の倭寇

嘉靖期の終わりは、王直時代の終焉でもあった。王直の処刑(1599)以降、倭寇の活動の中心は杭州・浙江から福建や広東など南方に移っていく。機をみるに敏なポルトガル人は明官憲の倭寇の鎮圧に協力し、1557年にはマカオに居住することを許可され、ここを貿易拠点として中国や日本との交易を本格化させる。1567年には海禁令も緩和される。

日本では、1588年7月8日、豊臣秀吉が「賊船の停止」令を出す。さらに朝鮮出兵により日本人海賊は大幅に減少した。秀吉の死後、1598年、五大老(前田利長・上杉景勝・毛利輝元・宇喜多秀家・徳川家康)は連名で平戸に書状を送っている(山田吉彦, 2006)。その内

容は、

先年、豊臣秀吉から発布された海賊停止令を破り海賊を行う者がいる。今後、海賊行為があったなら、領主ともども成敗をする。船の出入りを厳重に注意することこれ以降、倭寇は姿を消し東シナ海域が沈静する。

5. お わ り に

東アジアの地図を開いて、倭寇に関連する地名をつないでみると、多少いびつではあるが、東シナ海域に円（より正しくは楕円形というべきか）を描くことができる。倭寇が築きあげた海のネットワークといってもよからう。この海域の沿線に住む人々はある時期共通の経験をした。密輸・襲撃・略奪という、いわば裏の歴史を見てきた。歴史を正しく理解するには、権力の中心部にいる人々の「公」の歴史だけでなく、このような社会の周辺部、底辺部で生きている人々の歴史をも知ることが大切である。

中世の東アジアの歴史のなかで、倭寇は「海賊」という、とかく否定的な印象を与える言葉では表しきれない大きな役割を果たしたといえる。権力者や社会の制度にあえて逆らい、しぶとく生き抜くエネルギーは中世社会から近世に移っていく過程で一種の触媒となったのではなからうか。そう思って、中国の歴史を振り返ってみると、歴代の王朝はほとんどが名もない民衆の反乱・暴動による政権交代を繰り返してきたということに行きつく。明朝を開いた朱元璋（洪武帝）もその一人である。倭寇は時の権力を打倒することはできなかった。しかし、彼らによってヒト、モノ、情報が海を越えて運ばれたことによって東シナ海域の経済や文明の発展促進に貢献したといえるのではなからうか。

堀敏一（2008）は次のように述べている。

もともと明朝の海禁と朝貢の強制には無理がありました。前代まで盛んだった民間の取引を力によって阻止しようとしたのですから、それが密貿易になり、海賊になって現われるのは必然の勢いだったのです。……明朝の国家政策こそ文字どおり時代に逆行する反動というほかありません。密貿易といい海賊といいましたが、密貿易者が圧迫されるから、武装して海賊になるわけで、海賊は元来商人なのです。

できるだけ客観的に歴史を見る。そのためにはグローバルな観点から見る必要がある。日本の歴史を見るとき、日本国内の動向だけでなく周辺の、あるいは関連する国や地域の動きという大きな枠の中での日本を見なければならない。また日本側の文献資料だけでなく、外国の文献資料の持つ別の角度からの視点も忘れてはならない。原稿を書き進めるにつれて、その思いをさらに強くしていったということを書き添えて、この稿を閉じる。

参 考 文 献

- 新城俊昭（1997）：『高等学校 琉球・沖縄史』改定版，編集工房東洋企画
尾形勇・岸本美緒編（1998）：『中国史』山川出版社
川勝平太（1996）：「近代日本と近代世界システム」，竹内実他（1996），p.p. 129-189

- 小島毅 (2006) : 『海から見た歴史と伝統—遣唐使・倭寇・儒教』 勉誠出版
- 小山正明 (1985) : 『東アジアの変貌』 講談社
- 斯波義信 (1995) : 『華僑』 岩波書店
- 佐伯弘次 (2011) : 「日本中世に居住した外国人」, 森平雅彦他編 (2011) p.p. 71-81
- 佐藤信・五味文彦・高埜利彦・鳥海靖 (2008) : 『詳説日本史研究』 改定版, 山川出版社
- 許海山主編 (2006) : 『中国歴史』 綾装書局 (原文中国語)
- 白石一郎 (2004) : 『海のサムライたち』 文藝春秋
- 竹内実・村井章介・川勝平太・清水元・高谷好一 (1996) : 『日本史を海から洗う』 南風社
- 武田幸男編 (2000) 『朝鮮史』 山川出版社
- 武光誠 (2009) : 『日本史を動かした外国人』 青春出版社
- 田中健夫 (2012) : 『倭寇 海の歴史』 講談社 (原本1982年出版)
- 田中優子 (1995) : 『近世アジア漂流』 朝日出版社
- 張士陽 (2011) : 「銀経済と江南都市の発展」 並木・杉山編著 (2011), p.p. 134-138
- 藤堂明保・竹内見・影山輝國全訳注 (2010) : 『倭国伝』 講談社
- 仲尾宏 (2007) : 『朝鮮通信使』 岩波書店
- 長崎県高等学校教育研究会地歴公民部会歴史分科会編 (2005) : 『長崎県の歴史散歩』 山川出版社
- 長崎文献社編 (2010a) : 『旅する長崎学13』 長崎文献社
- 長崎文献社編 (2010b) : 『旅する長崎学14』 長崎文献社
- 中島楽章 (2009) : 『徽州商人と明清中国』 山川出版社
- 中島楽章 (2011) : 「ルーベンスの描いた朝鮮人」, 森平雅彦他編 (2011) p.p. 83-98
- 並木頼壽・杉山文彦編著 (2011) : 『中国の歴史を知るための60章』 明石書店
- 朴永圭 (1997) : 『朝鮮王朝実録』 (尹淑姫・神田聡訳) 新潮社
- 堀敏一 (2008) : 『東アジアの歴史』 講談社
- 松田毅一 (1993) : 『南蛮のバテレン』 朝文社
- 松浦章 (2003) : 『中国の海商と海賊』 山川出版社
- 松浦史料博物館 (2000) : 『史都平戸一年表と史談』 第8版, 松浦史料博物館
- 松竹秀雄 (1990) : 『海の長崎学』 くさの書店
- 宮崎正勝・監修 (2011) : 『倭国伝』 青春出版社
- 村井章介 (1993) : 『中世倭人伝』 岩波書店
- 村井章介 (1999) : 『中世日本の内と外』 筑摩書房
- 森平雅彦・岩崎義則・高山倫明編 (2011) : 『東アジア世界の交流と変容』 九州大学出版会
- 山田吉彦 (2006) : 『海賊の掟』 新潮社
- 吉田光邦 (1976) : 『日本科学史』 講談社
- 李進熙・姜在彦 (1995) : 『日朝交流史』 有斐閣
- Mason, R. H. P. & J. G. Caiger (1997) : *A History of Japan*, revised edition, Charles E. Tuttle Company
- Roberts, J. A. G. (2003) : *The Complete History of China*, Sutton Publishing Limited

(2012年1月10日受理)

Wako and Wang Zhi

Toru MIYAKE

This paper aims to describe the history of the East China Sea area in the medieval Japanese age, with an emphasis on the activities of *wako* in the area. Their activities have been largely neglected in official historical accounts as marginal. *Wako* is often defined as “Japanese pirates” in the 14th to 16th centuries. This simplified definition, however, fails to give the entire picture of *wako*. It is true that *wako* in their early days were Japanese who raided neighboring Korean islands and coasts for food and local people, whom *wako* used as their slaves or sold elsewhere as slaves, but this is only part of the *wako* history.

In the latter half of the 14th century, the Mongols, who ruled China in those days, invaded Kyushu, the western part of Japan, twice (in 1274 and 1281), but failed to conquer the country and had to withdraw. A great many people in northern Kyushu suffered the damage caused by the two wars, but the Japanese government in Kamakura did not have enough property for compensation. Some of the dissatisfied common people, as well as samurai warriors, in northern Kyushu began to sail as far as Korea and eventually China sometimes to trade and sometimes to attack and pillage coastal towns and villages. They were referred to as *wako* and were a source of fear for Koreans and Chinese.

The Mongolians were defeated in China and expelled to the north of the border in 1368. The newly-established Ming dynasty faced two problems: the Mongolians, who retreated into the north and the *wako*, who advanced to the southeastern part of China. While they were busy defending themselves against Mongolian invasions, the Ming dynasty imposed a strict ban on overseas trade by private citizens and merchants for fear that they might cooperate with *wako* intruders. The Chinese government monopolized overseas trading and began to trade formally with the Muromachi government in Japan, which had replaced the Kamakura government in 1333. The Japanese and Ming trade was temporarily suspended in 1423 as a result of a clash between two Japanese trading ships.

Some Chinese merchants took advantage of this incident and started smuggling with Japanese. They joined hands with Chinese pirates to protect themselves and their trading goods. Eventually, they armed themselves and came to work together with their Japanese counterparts. Although the word *wa* means “Japanese”, Chinese predominated the *wako* in the middle of the 16th century. There were Koreans, Southeastern smugglers, and even Portuguese among the *wako*.

One of the most prominent *wako* leaders was Wang Zhi (?–1559). He was originally a Chinese merchant, but he joined *wako* groups after he failed in his business in the 1530s. He

sailed to Japan as a smuggler and settled in Goto, an island at the western end of Japan, and later in Hirado, a seaport in the northwestern tip of Kyushu.

According to official school textbooks in Japan, two Portuguese visitors to a small island introduced matchlock muskets to Japan in 1453. Actually, however, their visit to Tanegashima island was arranged by Wang Zhi, who decided that the gun business was his new business opportunity. Wang also helped a Portuguese mercantile ship to come to Hirado, the first visit ever by Westerners to mainland Japan. By this time he was acknowledged as the paramount *wako* leader and the most wanted pirate by the Ming dynasty.

In 1548, the Ming authorities attacked an island off Ningbo, a port for official Japanese-Ming trade. The island had served as the largest base for *wako* activities since 1526, but now their facilities were completely destroyed, and *wako* had to retreat from the island and seek new bases elsewhere. This triggered a series of large counterattacks by Chinese *wako*. They raided south-eastern coastal cities. The Ming dynasty could not control them any longer, and many cities were captured and looted, and numerous innocent citizens were killed during the raids. The *wako* attacks lasted until 1557 when Wang Zhi decided to return home from Japan to China after his mother, wife and children were held in custody. He was executed later in 1559. The other Chinese *wako* fled west to the Fujian and Guangdong area. It was at the end of the 16th century that *wako* disappeared from the South China Sea.

As we have seen above, *wako* were not necessarily “Japanese pirates”. They were armed smugglers consisting of Chinese, Japanese, Koreans, and Southeast Asians. They contributed a great deal to the economic development and advance in civilization of the East China Area in the transitional period from the medieval age to early-modern times of Eastern Asia.